

国語科が外国語科から 学べることは何か？

最終回の今回は、国語と外国語の共通点と相違点をあらためて確認するとともに、小学校教育において国語科が外国語活動・外国語科から学べることは何かを考えてみたいと思います。



京都外国語大学教授 森 篤嗣
1975年、兵庫県生まれ。国立国語研究所准教授、帝塚山大学教授などを経て、現職。国語科教育だけでなく、外国語としての日本語教育の研究にも従事する。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

「言語の教育」としての意識

言うまでもなく日本語も英語も「言語」という点では共通しています。そうであれば、「言語の教育」という点も共通しているかという点、少し話が変わってきます。

外国語活動や外国語科では、「言語を学ぶ」という意識が児童たちにも強くありますし、それと呼応して教師も「言語を教える」ということを否が応でも意識するでしょう。しかし、国語科はどうでしょうか。実は国語科は「言語の教育」としての意識は、児童も教師もそれほどないのではないのでしょうか。これは当然といえば当然で、国語科で日本語の習得をしているわけではないからです。少なくとも日本語環境にある子どもたちの場

言葉を伝えるという視点

これらのことを踏まえて、国語科で「言語の教育」ということを意識するためにはどうすればよいのでしょうか。それは「言葉を伝える」という視点をもつことだといえます。

国語科に「言語の教育」という意識が薄いのは、「国語科で習わなくても日本語ができる」ということが影響しています。しかし、このときの「できる」というのはあくまで最低限ということで、「上手に伝えることができる」ということとは違います。言葉を伝えるという視点で考えると、どのような言葉や表現を選ぶのかということとはより、表情やジェスチャーなどの非言語コミュニケーションも重要になってきます。日

本の文化ではあまり大きなジェスチャーはなじみませんが、英語では好まれる傾向があります。日本語でも非言語コミュニケーションを取り入れることは、小学校教育において国語科が外国語活動・外国語科から学べることのひとつだといえます。

教師の言葉かけという視点

もう一つ小学校教育において国語科が外国語活動・外国語科から学べることとしては、教師から児童への言葉かけがあるでしょう。外国語活動・外国語科ではできるだけ英語で児童に話しかけることが多いでしょう。そのとき、児童はそれほど多くの英語を理解できるわけではないでしょうから、前述のように表情やジェスチャーを駆使して伝えようとする態度は、教師の側にも自然にあらわれます。

ぜひ、この「伝えようとする態度」を国語はもちろん、あらゆる教科で意識してみたいと思います。平田オリザさんの著作に『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』（二〇一二年／講談社）という本があります。教師はときとして「自分が話していることは伝わっている」という前提で話をしてみますが、伝わっていないかもしれない、わかりあえてい

国語科が学べることは何か

今回は小学校教育において国語科が外国語活動・外国語科から学べることは何かを考えてきました。ここで挙げた例のほかにも、新たに教科となる外国語科から学ぶことはたくさんあるでしょう。

しかしそのいっぽうで、あらためて国語科ができることにも気づくのではないのでしょうか。国語科では、教材文を通して児童の思考を活性化できます。母語だからこそ、外国語ではできない複雑な思考をよび起こせるので

す。そして、同世代と同時に同教材を読む、「みんなが自分と同じものを読んでも、同じ意見や感想をもつとは限らない」ことを学ぶのです。それは「わかりあえないこと」の根源を発見する作業であるともいえます。昔はみんな同じテレビを見て友達と感想を述べ合っていました。今はインターネットが普及し、同じものを見て感想を述べ合うという機会は激減しています。多様性の時代です。そんな時代だからこそ、国語科が果たす役割は、相対的により重要になってきているのです。

※1 左記の書籍では、授業の中での小学校教師の言葉かけの事例を集めて詳しく解説しています。
森篤嗣「授業を変えるコトバとワザ—小学校教師のコミュニケーション実践」(二〇一三／くろしお出版)



イラスト：カモ